

氷見市内遺跡発掘調査概報IV

加 納 金 宮 遺 跡

宇波ヨシノヤ中世墓群

2014年3月

氷見市教育委員会

氷見市内遺跡発掘調査概報IV

加納金宮遺跡

宇波ヨシノヤ中世墓群

2014年3月

氷見市教育委員会

序

東に富山湾を隔てた轍峰立山を仰ぐ氷見市は、古くから海の幸、山の幸に恵まれ、人々の生活の場として、数多くの文化遺産を生み育んできました。これら、郷土に残る文化財は先祖より受け継がれてきたものであり、私たちはあらためてその歴史的、文化的価値を再認識しながら、末永く子孫に引き継いでゆかねばなりません。

本書で報告するのは、氷見市教育委員会が実施した試掘調査および測量調査の概要です。

栄町地内の加納金宮遺跡では、工場跡地の利活用に先立つ試掘調査を実施いたしました。調査では、中世から近世の遺物が散布することを確認できました。得られた情報はわずかですが、調査例が少ない地域での試掘調査であり、今後の埋蔵文化財保護のための貴重な資料となりました。

また、平成24年度に測量調査を実施した宇波ヨシノヤ中世墓群は、能越自動車道の工事に伴う測量作業の最中に新たに発見された遺跡です。幸い、国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所をはじめとする工事関係者の皆様のご理解とご協力を得ることができ、本書で報告する測量調査とその後の本発掘調査を行うことができました。

これら調査の成果が今後の文化財保護の一助となるとともに、地域の歴史への关心、理解につながることを願っております。

試掘調査および測量調査の実施にあたり、土地所有者の方をはじめ、関係機関の皆様に多大なるご協力をいただきました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

平成 26 年 3 月

氷見市教育委員会

教育長 前 辻 秋 男

例　　言

- 1 本書は、平成25年度に富山県氷見市栄町地内で実施した加納金宮遺跡試掘調査の調査報告書である。あわせて、平成24年度に同宇波地内において実施した宇波ヨシノヤ中世墓群測量調査の調査成果についても報告する。
- 2 調査は、市内で計画されている開発行為に伴い、氷見市教育委員会が実施した。
- 3 調査費用は、国庫補助金・県費補助金の交付を受けた。
- 4 調査期間は、以下のとおりである。

平成24年度　宇波ヨシノヤ中世墓群測量調査　平成25年1月29日～3月15日

平成25年度　加納金宮遺跡試掘調査　平成25年4月24日～4月26日（実働3日）

- 5 調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習・スポーツ課に置いた。事務担当は下記のとおりである。

平成24年度　課長：坂本研資、副主幹：大野 究、主査：天坂 正、主任学芸員：廣瀬直樹

平成25年度　課長：坂本研資、副主幹：大野 究、主査：布尾 誠、主任学芸員：廣瀬直樹

- 6 調査および本書の執筆・編集・製図・トレースは、廣瀬が担当した。また遺物の実測は、廣瀬を中心となり、整理作業員三矢恵京が行った。
- 7 発掘作業員の派遣は社団法人富山県シルバー人材センター連合会に委託し、氷見市シルバー人材センターから派遣を受けた。調査に参加した作業員は次のとおりである。

清水不二雄、向 修誠、山下 異（以上、氷見市シルバー人材センター）

- 8 出土遺物と調査に関わる資料は、氷見市教育委員会生涯学習・スポーツ課が保管している。
- 9 加納金宮遺跡の遺跡略号は、「KN KM」とした。
- 10 調査および本書の作成にあたり、下記の機関から多大なご教示、ご協力を得た。記して感謝申し上げる（五十音順・敬称略）。

株式会社イビソク　株式会社エイ・テック　国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所
竹沢建設株式会社　富山県教育委員会生涯学習・文化財室　富山県高岡土木センター
萩原建設株式会社　氷見市建設農林部能越自動車道対策室　氷見市立博物館

目 次

第1章：序説

第1節：氷見市の位置と環境.....1

第2節：平成25年度事業の概要.....1

第2章：工場跡地利活用に先立つ加納金宮遺跡試掘調査

第1節：調査対象地.....3

(1) 地理的環境.....3

(2) 歴史的環境.....3

(3) 遺跡の概要.....5

第2節：調査の概要.....5

第3節：調査結果.....6

(1) 調査の成果.....6

(2) 出土遺物.....8

(3) まとめ.....10

第3章：能越自動車道七尾氷見道路整備事業に先立つ宇波ヨシノヤ中世墓群測量調査

第1節：調査対象地.....11

(1) 地理的環境.....11

(2) 歴史的環境.....11

第2節：調査の概要.....13

(1) 調査の経緯.....13

(2) 平成24年度測量調査の概要.....14

(3) 平成25年度本発掘調査の概要.....14

引用・参考文献.....19

報告書抄録・奥付

表 目 次

第1表 加納金宮遺跡 基本層序.....6

挿図目次

第1図	調査対象地位置図	2
第2図	加納金宮遺跡と周辺の遺跡	4
第3図	加納金宮遺跡試掘トレンチ位置図	7
第4図	加納金宮遺跡出土遺物実測図	9
第5図	宇波ヨシノヤ中世墓群と周辺の遺跡	12
第6図	宇波ヨシノヤ中世墓群全体平面図	15
第7図	宇波ヨシノヤ中世墓群集石遺構（下段）平面図	17
第8図	宇波ヨシノヤ中世墓群集石遺構（上段）平面図	18

写真図版目次

図版1	加納金宮遺跡周辺空中写真	国版8	加納金宮遺跡試掘調査（7）
図版2	加納金宮遺跡試掘調査（1） 1. 調査区近景（南から） 2. 調査区近景（南西から） 3. 調査区近景（西から）	国版9	1. 作業風景（1） 2. 作業風景（2） 3. 作業風景（3）
図版3	加納金宮遺跡試掘調査（2） 1. T 1 土層断面 2. T 3 土層断面 3. T 4 土層断面	国版10	加納金宮遺跡遺物写真（1） 1. 中世珠洲焼 2. その他、土器陶磁器類
図版4	加納金宮遺跡試掘調査（3） 1. T 5 土層断面 2. T 6 土層断面 3. T 8 土層断面	国版11	加納金宮遺跡遺物写真（2） 1. フイゴの羽口 宇波ヨシノヤ中世墓群測量調査（1） 2. 宇波ヨシノヤ中世墓群近景 (北東から)
図版5	加納金宮遺跡試掘調査（4） 1. T 11 土層断面 2. T 13 土層断面 3. T 13 遺構検出状況	国版12	宇波ヨシノヤ中世墓群測量調査（2） 1. 集石墓遠景（北東から） 2. 集石墓近景（南東から） 宇波ヨシノヤ中世墓群現地踏査 1. 下段の集石遺構 2. 上段の集石遺構 3. 五輪塔
図版6	加納金宮遺跡試掘調査（5） 1. T 15 土層断面 2. T 18 土層断面 3. T 21 土層断面		
図版7	加納金宮遺跡試掘調査（6） 1. T 23 土層断面 2. T 24 土層断面 3. T 25 土層断面		

第1章 序 説

第1節 氷見市の位置と環境（第1図）

氷見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに旧太田村を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230km²、人口は約5万1千人である。

市域は、北・西・南の三方が標高300～500mの丘陵に取り囲まれ、これら丘陵から派生する小丘陵により、西条・十三谷・上庄谷・八代谷・余川谷・灘浦の6つの区域に分けられる。また市の東側は、約20kmの海岸線をもって富山湾に面している。市の北半部は、上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川といった小河川とその支流からなる谷地形であり、上庄川流域以外はまとまった平野が少ない。一方、市の南半部は、主として布勢水海（十二町潟）が堆積してきた平野と、その砂嘴として発達した砂丘からなる（氷見市1999・2000）。

第2節 平成25年度事業の概要

平成25年度の埋蔵文化財発掘調査事業では、氷見市内の民間開発行為に先立つ加納金宮遺跡の試掘調査1件を実施した。なお、試掘調査の実施にあたり、国庫と県費の補助を受けた。

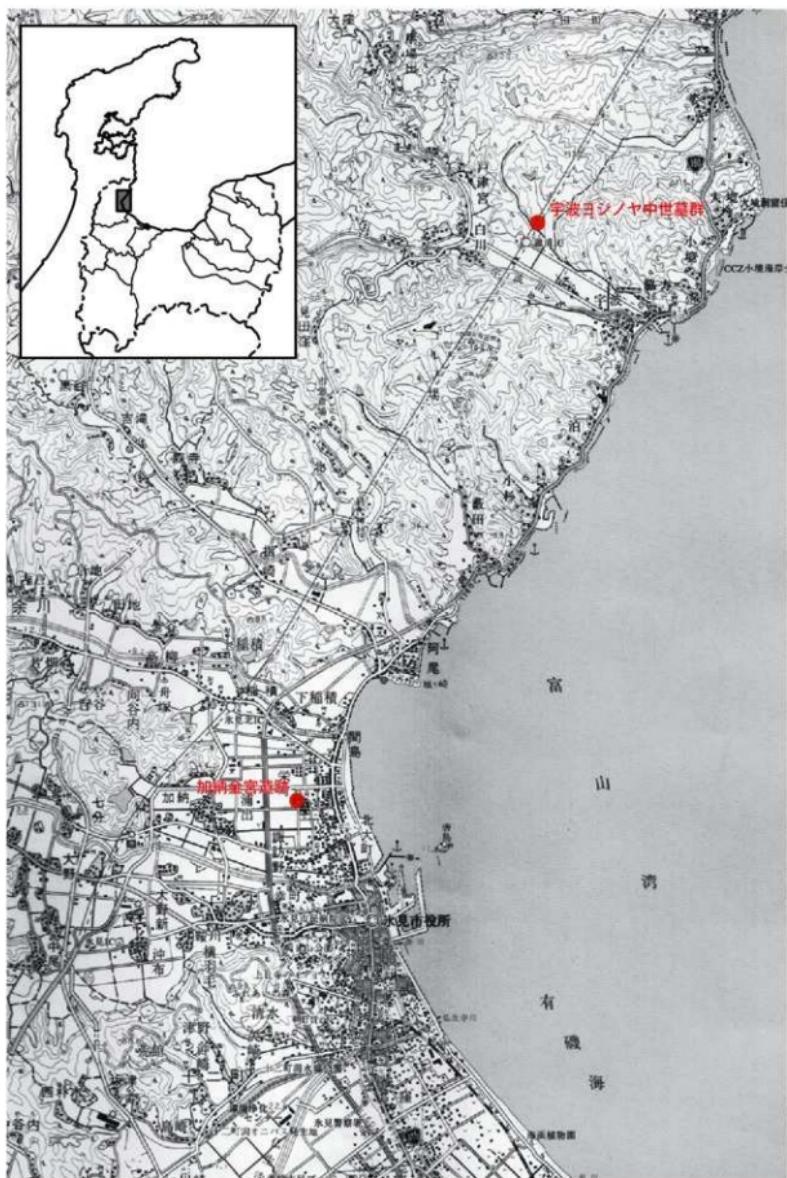
加納金宮遺跡の試掘調査は、遺跡内に立地していた工場跡地の開発計画に伴うもので、平成24年度に土地所有者より試掘調査の依頼を受けた。平成25年度事業として調査の準備を進め、平成25年4月下旬に調査を実施した。

加納金宮遺跡出土遺物の整理作業は、平成25年9月から着手し、洗浄・注記・実測等を実施した。また、平成26年1月より、本文の執筆、図面トレース作業、遺物写真の撮影等を実施した。

平成25年11月には、富山県高岡土木センターより依頼を受け、一般国道415号（谷屋大野バイパス）道路改築事業に先立つ天場山南遺跡（氷見市谷屋地内）の試掘調査を平成25年度中に実施することになった。現地の調査は平成26年3月の実施とし、それに向けて、富山県高岡土木センターによる地元説明等が行われた。また、同じく平成25年度中の事業として、氷見市建設農林部能越自動車道対策室の依頼による能越自動車道氷見南ICの整備に伴う惣領浦之前遺跡の試掘調査を予定していたが、対象地周辺の工事延長により、平成26年3月の実施となった。どちらも国庫と県費の補助を受けての実施だが、本報告書の編集時には調査未実施であり、整理作業および調査成果の報告は次年度以降に行う予定である。

なお、平成24年度事業として、平成25年1月から3月にかけて、能越自動車道灘浦IC北側の工事現場で平成24年12月に不時発見された宇波ヨシノヤ中世墓群の測量調査を実施した。本報告書では、その測量調査の成果についても報告する。不時発見から測量調査の実施へ到る概要については、第3章に記載した。

また平成23年度より、同じく国庫と県費の補助を受け、氷見市内遺跡詳細分布調査事業に伴う小窪寺総合調査事業を実施している。事業は、平成23年度から5か年の計画で、今年度はその3か年目である。平成23・24年度の2か年で作成した、小窪寺跡・小窪瓦窯跡周辺の平面図と、昭和38年国土地理院撮影の航空写真を基に、ほ場整備以前の地形図の復元を実施したほか、小窪瓦窯跡とその周辺部の試掘調査を実施した。この小窪寺総合調査事業の成果については最終年度となる平成27年度に取りまとめを行う予定である。



第1図 調査対象地位置図 ($S = 1/50,000$)

第2章 工場跡地利活用に先立つ加納金宮遺跡試掘調査

第1節 調査対象地

(1) 地理的環境

加納金宮遺跡が所在する栄町は、かつての大字稲積・加納の各一部よりなる。東方は北大町や大字間島、西方は加納、南方は北大町・諏訪野、北方は大字間島と接している。主体部はもと加納の一部で、俗に「野」といい、また南方の加納町に対して「北加納」とも俗称した（氷見市2000）。

加納金宮遺跡は、余川川と上庄川に挟まれた下流域の平坦地、標高約3mに立地する。遺跡の西側には、国道160号が南北方向に通る。東側は海岸沿いに発展した町部に接する。遺跡の周辺には水田地帯が広がり、近年は宅地化が進んでいる。遺跡北側を流れる余川川は、かつて稲積河とも間島川とも呼ばれ、氾濫を繰り返す川だったといわれる（児島1978）。また南側には市内では長さ、流域面積とも最大の川である上庄川が流れる。

弥生時代から古代にかけて、上庄川の下流左岸には加納潟と仮称される潟湖が広がっていたと推測され、さらにつきこの加納潟は余川川下流域まで広がっていた可能性がある。加納潟の推定範囲からすると、加納金宮遺跡は、加納潟を海から隔てる砂丘地帯に立地し、西側が潟に面していたと考えられる。

調査対象地は、加納金宮遺跡ほぼ中央に位置する工場跡地である。現在は工場が取り壊され、更地となっている。

(2) 歴史的環境（第2図）

以下、加納金宮遺跡周辺の遺跡について概観する。

加納金宮遺跡の西側には加納潟の推定地があり、周辺の遺跡はそれを取り囲むように立地する。加納金宮遺跡と同じ砂丘上には、諏訪野A遺跡、諏訪野B遺跡、稲積三ツ屋前遺跡、稲積三屋野遺跡が所在する。これらの遺跡では古代から中世の遺物が確認されるが、調査例が少なく、詳細は不明である。

加納潟西側に位置する丘陵周辺には、古墳群や横穴群が分布する。このうち、加納蛭子山古墳群では、古墳時代初頭から後期と推定される古墳が継続的に築造されている。また、同古墳群が立地する丘陵斜面には、古墳時代終末期に総数88基以上と推測される加納横穴群が造営されている。

加納横穴群の北東、加納潟に面して営まれた稲積川口遺跡では、7世紀前半の旧余川川とみられる河道が検出され、当該期の須恵器や内黒土師器とともに木製農具の馬鍬が出土した。発掘調査では、8世紀後半から9世紀の遺物・遺構も確認されている（氷見市教委2009）。そのほか古代の遺跡として、阿尾島田A遺跡（7世紀後半～9世紀後半）、稲積天坂北遺跡（7～10世紀代）などがある。このうち、阿尾島田A遺跡では8世紀第3四半期及び8世紀第4四半期～9世紀第1四半期の掘立柱建物が、稲積天坂北遺跡では8世紀代の掘立柱建物が検出されている。また、稲積天坂北遺跡の南西に位置する稲積天坂遺跡では、弥生・古代・中世・近世の各時代の遺物・遺構が確認されている。

遺跡の北東側、富山湾に突き出した独立丘陵上に立地するのが阿尾城跡（富山県指定史跡）である。能登へ向かう街道と海上交通の要衝に位置し、城の北側には城下町が形成されていた。城跡には本丸・二の丸・三の丸と伝えられる場所があり、伝二の丸での発掘調査では15世紀後半から16世紀末頃の遺物が出土している。15世紀中頃に八代氏によって築城され、戦国時代末期には九州を出自とする菊池氏が城主となった。天正時代末より、菊池氏は前田利家の家臣として活躍するが、慶長初めに当主が没し、子孫は金沢へ移った。阿尾城はその頃に廃城になったと考えられる（氷見市立博物館2010）。



第2図 加納金宮遺跡と周辺の遺跡 (S = 1 / 25,000)

- | | |
|------------------------|---------------------------------|
| 1 加納金宮遺跡（弥生・中世・近世） | 18 七分一堂口遺跡（弥生・古墳・古代・中世） |
| 2 諏訪野A遺跡（古代） | 19 加納桜打遺跡（古代） |
| 3 諏訪野B遺跡（古代・中世） | 20 加納南古墳群・加納城跡（古墳・中世） |
| 4 稲積三ツ屋前遺跡（古代） | 21 加納谷内遺跡（縄文・古代・中世・近世） |
| 5 稲積三屋野遺跡（古代・中世） | 22 加納蛭子山古墳群・加納横穴群（古墳・飛鳥白鳳） |
| 6 唐島遺跡（中世・近世） | 23 加納新池古墳群（古墳） |
| 7 七軒町遺跡（縄文） | 24 木谷城跡（南北朝） |
| 8 鞍川金谷遺跡（縄文・弥生・古墳） | 25 稲積天坂遺跡（弥生・古代・中世・近世） |
| 9 鞍川A中世墓（中世） | 26 稲積天坂北遺跡（古代・中世・近世） |
| 10 鞍川B中世墓（中世） | 27 稲積川口遺跡（縄文・飛鳥白鳳・古代・中世） |
| 11 鞍川諏訪社遺跡（中世・近世） | 28 稲積前田遺跡（弥生・古代・中世） |
| 12 鞍川C遺跡（中世） | 29 稲積才オヤチ南遺跡（古代・中世） |
| 13 鞍川D遺跡（古代・中世・近世） | 30 稲積才オヤチ古墳群（古墳） |
| 14 鞍川中A遺跡（古代・中世・近世） | 31 阿尾島田A遺跡（縄文・古代・中世） |
| 15 鞍川中B遺跡（弥生・古代・中世・近世） | 32 阿尾島田B遺跡（縄文・古代・中世） |
| 16 K B - 2 遺跡（古代） | 33 阿尾城跡・阿尾城山横穴群（弥生・飛鳥白鳳・中世・近世初） |
| 17 大野中遺跡（古代） | |

(3) 遺跡の概要

加納金宮遺跡は、かねてより遺物の散布が知られていた遺跡である。昭和58年刊行の『氷見市遺跡地図』において遺跡として周知され、土師器の採集が報告されている（氷見市教育委員会・氷見市立博物館1983）。また、平成6年度に氷見市教育委員会が実施した分布調査では、土師器、須恵器、珠洲焼、越中瀬戸、中国青磁、中国青花がそれぞれ1点、計6点が採集されている（氷見市教育委員会・富山大学考古学研究室1995）。

加納金宮遺跡の東側には、金宮神社が所在する。金宮神社は、加納八幡神社の末社で、祭神は金宮彦命である。『富山県神社誌』によれば、「カナミヤ」とは、「カノウの宮」の訛りであるとの説があり、また一方では、「金宮」を鍛冶とのかかわりとする説もある、とする。『富山県神社誌』から引用すると、「近隣の阿尾城主菊池氏の刀匠が「カネノミヤ」は金工に縁有りと仰ぎ、神域に於いて鍛刀に努めるに至ったと云ふ、現に先年、鑄鉄屑が伝説地から多く出土した」という（富山県神社庁1983）。『氷見市史』でも金宮神社付近で若干の金糞が発見され、この神社が鍛物師・鍛冶屋集団の守り神だったと考えられるとの説を紹介している（氷見市1963）。また『加納史話』では、金糞が出土した地点を神社後方の畠地としている（加納史話編集委員会1970）。

第2節 調査の概要

平成24年度中より、加納金宮遺跡の範囲内に所在する工場跡地について、用地の管理者との間で土地の売買と今後の利活用に関する協議を行ってきた。氷見市教育委員会では、工場跡地が加納金宮遺跡の大部分を占めており、当遺跡の調査の蓄積もないため、事前の試掘調査が必要であると判断した。なお試掘調査は、平成25年度に国庫と県費の補助を受けて実施することとした。

平成25年4月より、試掘調査の準備を開始した。工場跡地のうち、建物が建設されていた北側は、建物解体後に整地され、盛土がむき出しの未舗装となっているが、南側は、アスファルト舗装が施されたままであった。当初計画していた試掘調査の案では、アスファルト舗装部分についても舗装を重機で破碎し、試掘トレンチの掘削を行う予定であった。だが、試掘調査事前の管理者との現地打ち合わせにおいて、アスファルト舗装部分は駐車場としての利用が継続されており、掘削は難しいとの申し入れを受けた。そのため、調査対象地北側の整地された建物跡地にのみ試掘トレンチを掘削し、調査を行うこととした。ただ、建物跡地については、工場の建設および解体作業によって攪乱を受けている可能性があるため、遺構・遺物の残存状況について把握できない可能性があった。そこで、未舗装部分での調査の状況を見極め、必要であれば舗装部分の調査も行う判断をすることとした。

調査の概要是以下のとおりである。

所 在 地：氷見市栄町

調査対象面積：8763.52m²

發 堀 調 査：312m²

調 査 主 体：氷見市教育委員会

調 査 担 当 者：氷見市教育委員会 生涯学習・スポーツ課 主任学芸員 廣瀬 直樹

調 査 期 間：平成25年4月24日～26日（のべ3日）

調 査 原 因：工場跡地の利活用

第3節 調査結果

(1) 調査の成果（第3図）

前節で述べたとおり、調査対象地は工場跡地の整地部分とし、アスファルト舗装の駐車場は対象から除外した。また、整地土層・盛土層がおよそ80~120cmと厚く、さらに碎石を多く含むためしまりがなく、崩落の危険性があったことから、約3×4mの試掘坑による調査とし、記録後は速やかに埋め戻しを行った。

調査では、試掘トレンチT 1~26の計26基掘削して調査を行った。前述のように80~120cmある整地土層（I層）および盛土層（II層）を掘削すると、その直下に旧耕作土層と推測される黒褐色粘質土ないし黒褐色砂質土（III層）が検出された。このことから、工場の建設工事および解体工事は、当初の建設時に盛土された整地土内で收まり、旧耕作土には攪乱を与えていないことが確認された。よって調査対象外としたアスファルト舗装部分については、今回の試掘調査の成果からある程度類推することが可能であると判断した。

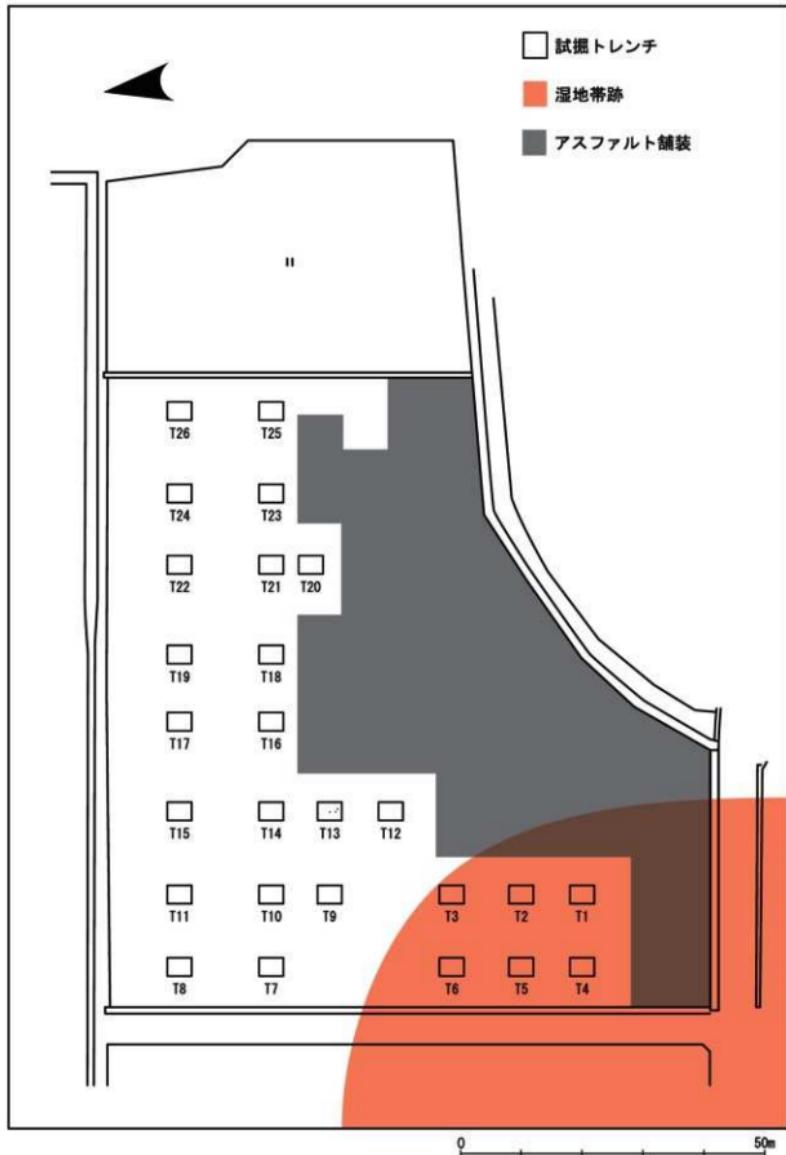
盛土の下層で検出される旧耕作土層（III層）は、黒褐色粘質土ないし黒褐色砂質土である。一部のトレンチでは、耕作時に施工された暗渠排水管が残存する。このIII層中には、弥生時代から近世の遺物が包含される。

旧耕作土層直下には、灰色砂ないし暗灰黄色砂の地山層（V層）が検出される。この砂層は、現地表面（整地土上面）から、おおむね140~170cmの深さで確認できる。また、調査区の南西側（T 1~6）でのみ、旧耕作土と地山の間に厚さ16~30cm程度の腐食植物が混じった灰黄褐色砂質土層（IV層）が検出される。このIV層からは、中世青磁が2点出土した。

造構としては、T 13で直径約15cmの小穴を3基検出した。これらは、旧耕作土層（III層）の直下で検出されたもので、稻架穴と考えられる。

第1表 加納金宮遺跡 基本層序

I層	整地土	30~110cm	褐色粘質土・碎石。工場解体時の整地土層。
II層	盛土	5~70cm	緑灰色粘質土・碎石。工場敷地の盛土層。
III層	旧耕作土	20~80cm	黒褐色粘質土～黒褐色砂質土。弥生～近世遺物出土。
IV層	旧湿地堆積か	16~30cm	灰黄褐色砂質土～暗褐色砂質土。腐食植物混じる。中世青磁出土。T 1~6のみで検出される。
V層	地山		灰色砂～暗灰黄色砂



第3図 加納金宮遺跡試掘トレンチ位置図 (S = 1/800)

(2) 出土遺物（第4図）

試掘調査では、旧耕作土層（Ⅲ層）を中心に79点の遺物が出土した。内訳は、弥生土器8点、中世珠洲焼12点、中世土師器22点、青磁4点、白磁1点、瀬戸美濃1点、近世越中瀬戸8点、越前焼2点、その他近世陶磁器類17点、フイゴの羽口1点、鉄滓1点、焼けた粘土塊2点である。このうち、青磁2点がIV層から出土し、そのほかはⅢ層からの出土である。

ここでは18点を図示した。

1～7は中世珠洲焼である。1は広口の壺口縁部で、口径21.6cmを測る。口縁はくの字状で、外端部を三角に引き出す。残存部からは、外面の平行叩き等の痕跡は確認できない。6～7は壺蓋類の体部破片で、いずれも外面に平行叩き痕が残る。

8～11は中世土師器皿である。8は口径6.8cm、器高1.6cmを測る。口縁部に煤が付着しており、灯明皿として用いられたものであろう。9は口径8.8cm、器高1.85cmを測る。10は口径9.8cm、器高2.2cmを測る。11は口径10.9cm、器高2.4cmを測る。いずれも非クロコア成形で、平底気味の底部から口縁部を外反させる。15世紀代から16世紀代のものであろう。

12は青磁の底部破片である。IV層より出土した。高台径5.0cmを測る。見込みは軸を輪状に搔き取る。

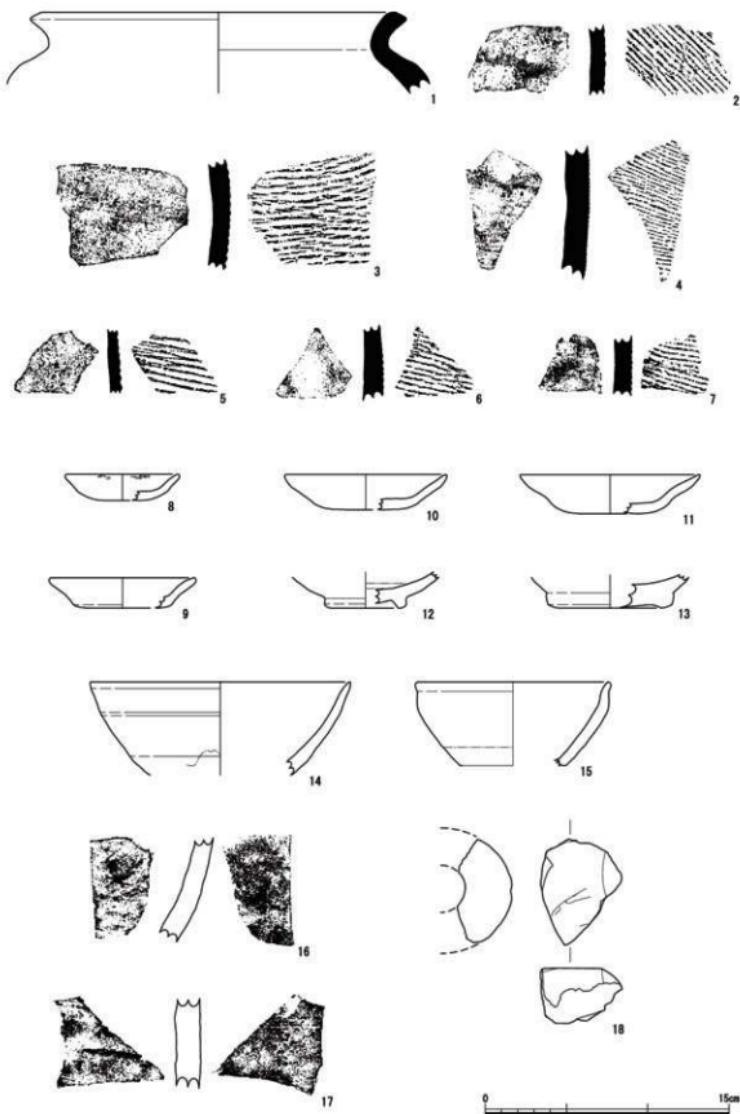
13は白磁の底部破片である。高台径7.6cmを測る。高台は厚く、高台内部の削り込みは浅い。

14は瀬戸美濃の灰釉平碗である。口径16.0cmを測り、内面および外面上半にオリーブ灰色を呈する灰釉を施す。

15は越中瀬戸の天目碗である。口径11.7cmを測る。内面および外面上半に鉄釉を施す。鉄釉は無光沢で、褐色を呈する。

16・17は越前焼の壺蓋類体部破片である。16は、外面が灰黄褐色、内面が灰黄色、胎土が灰白色を呈する。17は、外面が褐色、内面が橙色、胎土が黄灰色を呈する。内面は横方向にナデを施し、外面上部には2条の沈線が確認できる。

18はフイゴの羽口である。外径約7.7cm、内径約2.9cm、残存長5.0cmを測る。面取りされた端部外面にわずかに鉄滓が付着する。



第4図 加納金宮遺跡出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

(3) まとめ

今回の試掘調査では、整地土層・盛土層の下に旧耕作土層があり、その中から弥生時代から近世の遺物が出土した。

調査区の南西側では、旧耕作土の直下に厚さ16~30cm程度の腐食植物が混じった灰黄褐色砂質土層が検出された。これは湿地帯の痕跡と推測される。第1節(1)地理的環境で述べたように、加納金宮遺跡の西側には、弥生時代から古代にかけて加納潟と仮称される潟湖が広がっていたと推測される。調査では湿地跡から青磁片が出土しているため加納潟と直接関わるものではないが、中世から近世にかけて、旧加納潟の後身の可能性がある湿地帯が遺跡の南西側に広がっていたものと推測される。図版1に示した空中写真においても、ほ場整備前の旧地形では遺跡南西側に湿地帯の痕跡らしき区画があるのが読み取れる。

遺構は、稲架穴とみられる小穴が検出されたのみであった。旧耕作土中の遺物は、新旧の遺物が混ざった状態で、おそらく過去の耕作等によってある程度の攪乱を受けているものと考えられる。ただ遺物の出土状況としては、中世から近世までの遺物がまとまった量出土しており、調査対象地近辺に遺跡の主体があるものと推測される。その位置は金宮神社と現在の集落がある調査対象地東側の砂丘部であろう。

また、加納金宮遺跡ではかつて鉄滓が出土し、鍛冶集団との関わりが指摘されていた。今回の調査では、鍛冶に関連する遺物としてフイゴの羽口が1点、鉄滓が1点、焼けた粘土塊が2点出土した。

今回実施した試掘調査では、遺物は出土したものとの遺構が伴うものではなく、かつての耕作等によりある程度の攪乱を受けているものと推測される。そのため、今後の工場跡地の利活用に際しては、本発掘調査を行う必要は無いと判断した。ただ、広範囲に遺物の散布は確認されるため、工事等に際して立会調査を行い、遺跡の保護に努めたいと考えている。

第3章 能越自動車道七尾氷見道路整備事業に先立つ 宇波ヨシノヤ中世墓群測量調査

第1節 調査対象地

(1) 地理的環境

灘浦地区は、宇波川、下田川などの小河川が流れる市の北部地域で、丘陵が海岸にせり出し、平野が比較的少ない地形である。県境を越えた北西、石川県鹿島郡中能登町には石動山(565m)がそびえる。

宇波ヨシノヤ中世墓群が所在する宇波地区は、宇波川の河口に位置する。宇波川沿いおよび海岸沿いに小平地が広がり、北・南・西方に丘陵山地が連なる。宇波川は、石川県鹿島郡中能登町の石動山の南斜面に発し、県境を越えて白川地区で五十谷川と合流、谷平野を経て宇波地区で海に入る長さ約9.5kmの二級河川である。

宇波ヨシノヤ中世墓群は、宇波地区の北西端に所在し、白川地区、戸津宮地区に隣接する。遺跡は、宇波川下流左岸の丘陵北東側の斜面標高25~30mに立地し、南西側には能越自動車道灘浦ICが整備されている。また、宇波ヨシノヤ中世墓群の全城が能越自動車道の建設予定地となっているため、隣接する熊野神社古墳群と併せて、工事による削平が予定されている。

(2) 歴史的環境（第5図）

灘浦地区は、丘陵が海岸にせり出しており、平野が比較的少ない地形であるが、縄文時代前期末から中期にかけて海岸部の平野や断崖に穿たれた海食洞の利用が始まっている。縄文時代の遺跡としては、大境洞窟遺跡（国指定史跡）や大境エンニヤマ下洞窟遺跡、泊洞窟遺跡などの洞窟遺跡、前期末に人々が渡った虹が島遺跡、海岸に面した丘陵裾部に営まれた中期後葉の中波貝塚がある。また、標高80~90mの台地上に位置する長坂貴船遺跡は、中期末葉の集落遺跡と考えられる。

弥生時代から古墳時代には海岸部周辺を中心に生活が営まれたと推測され、大境洞窟遺跡で弥生時代中期中葉から古墳時代後期の遺物が出土している。また、宇波川の流域を中心に古墳群や横穴群が分布しており、宇波ヨシノヤ中世墓群の立地する丘陵尾根には熊野神社古墳群、谷部を挟んだ南東側には宇波安居寺古墳群が所在する。

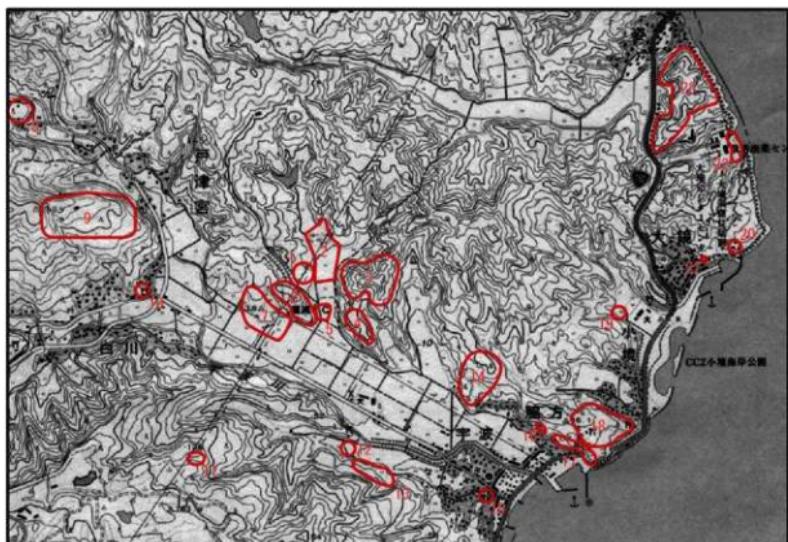
古代の遺跡としては、7世紀後半から8世紀の集落跡である宇波西遺跡、7世紀初めから8世紀初め頃まで製塩が営まれた九殿浜遺跡がある。

石動山に所在する石動山天平寺（石動寺）は、古代から修驗道で栄えた。最盛期の中世には360余りの院坊と衆徒3000人を擁したと伝えられる。政治的な影響力も強く、南北朝の動乱期だった建武2年（1335）と戦国期の天正10年（1582）の2回にわたって兵火に焼かれている。中世・近世の灘浦地区はこの石動山天平寺の強い影響を受けており、多数の遺跡が所在する。戸津宮中世墓群、千人塚、長坂行入塚、長坂落合中世墓、長坂ソウト遺跡、脇方谷内出中世墓、脇中世墓などの中世墓群や各所に集積された石造物なども石動山信仰に関連する可能性があろう。なお、石動山への主な登山道は石動山七口といわれ、越中側には平沢口（平沢道・長坂道）、大窪口（大窪道・八代仙道）、角間口（角間道）の3つの登山道があった。その中でも、特に中世において越中側からの主参道となったのが大窪道である。富山湾に面した阿尾城下を起点とし、白川地内を通って石動山へ到る古道で、石敷の道、道標、多数の石造物、寺坊跡などの伝承地が残る。

また、中世には、灘浦海岸一帯で産出される微粒砂岩「藪田石」を用いた石造物が多数製作されている。その分布は氷見市内にとどまらず、射水、砺波、五箇山、黒部、立山などでも確認されている。

南北朝期の観応の擾乱では、反幕府勢力であった桃井氏の拠点が越中にあったため、越中国内は動搖し、石動山やその山麓に位置する白川・宇波地区でもたびたび戦闘が行われた。そのため、周辺には白川地区的白河城跡や、宇波地区的宇波城跡など、南北朝期の山城が築かれている。

このほか、宇波地区と白川地区的境には奈賀礼社という神社があったというが、ほ場整備により現在は失われてしまっている。社殿はなく、境内にある石を神体としていたとされ、現在白川地区的橋鉢神社境内にある石造物は、奈賀礼社から移されたものだという。



第5図 宇波ヨシノヤ中世墓群と周辺の遺跡 (S = 1/25,000)

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 1 宇波ヨシノヤ中世墓群（中世） | 13 宇波庚申塚（不明） |
| 2 NE J - 2 9 遺跡（古代） | 14 脇方西古墳群（古墳） |
| 3 宇波城跡（中世） | 15 宇波古墳群・宇波神社遺跡（古墳・中世） |
| 4 宇波安居寺古墳群（古墳） | 16 脇方谷内出中世墓（中世） |
| 5 宇波ヨシダ遺跡（古墳・中世） | 17 脇方横穴群（飛鳥白鳳・中世） |
| 6 熊野神社古墳群・集石墓（古墳・中世） | 18 脇方十三塚古墳群・集石墓（古墳・中世） |
| 7 宇波西遺跡（弥生～近世） | 19 髪塚（中世） |
| 8 戸津宮中世墓群（中世） | 20 大境洞窟遺跡（縄文～中世） |
| 9 白河城跡（南北朝・戦国） | 21 大境エンニヤマ下洞窟遺跡（縄文・弥生） |
| 10 橋鉢神社遺跡（縄文） | 22 九殿浜遺跡（縄文～中世） |
| 11 宇波高坂遺跡（近世） | 23 姿城跡（戦国） |
| 12 宇波コウラウラ遺跡（古代・中世） | |

第2節 調査の概要

(1) 調査の経緯

平成24年12月6日、宇波地内において能越自動車道建設予定地で測量作業中の測量業者が、集石造構および五輪塔を発見した。直ちに、測量業者より氷見市教育委員会生涯学習・スポーツ課学芸員へ連絡が入り、翌7日午前に測量業者が持参した図面および写真で位置確認を行った。その結果、発見された集石造構は、当該地の周知の遺跡である熊野神社古墳群のさらに北側に所在する新規の遺跡であることが確認された。この時点で、富山県教育委員会生涯学習・文化財室へ遺跡発見の旨を連絡した。

同日午後、国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所（以下、富山河川国道事務所）の建設監督官、氷見市能越自動車道対策室職員、当該地区の建設業者現場代理人の立ち会いのもと、氷見市教育委員会生涯学習・スポーツ課学芸員2名が現地の踏査を実施した。踏査では、方形で約2m四方の集石造構1基を確認し、集石造構から離れた地点で五輪塔空風輪1点を採集した。また、測量中に発見された五輪塔は、空風輪1点、火輪3点、水輪6点、地輪1点で、その他に板石塔婆ないし基礎石とみられる石材が1点あった。周辺は、もともと杉が植林されていたが、測量作業の前に伐採され、下草も刈り払われていた。そのため、能越自動車道の路線決定後に実施された分布調査では未発見であった集石造構や五輪塔が露わとなっていた。遺跡を発見した測量業者によると、発見された五輪塔は、重機による損壊が懸念されたため、すでに工事関係者によって別の場所へ集積、積み直しが行われたとのことであった。また氷見市教育委員会への連絡と同時に国土交通省への報告も行われており、次週より始まる予定だった表土掘削は中止の方向で調整が進められていた。

踏査にあたり、富山河川国道事務所の建設監督官と建設業者現場代理人から経緯を聞いた。あわせて遺跡の不時発見の場合の対応について説明し、工事を中止したうえであらためて協議および現地調査の機会を持つことになった。

同日夕方、踏査および現地での協議結果を富山県教育委員会生涯学習・文化財室へ伝達し、今後、この件に関しては氷見市教育委員会が主体となって調整、調査を行うこととなった。その後、富山河川国道事務所調査第二課と遺跡の扱いについて協議し、再度、現地踏査を実施することになった。また12月14日付けで、国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所より、文化財保護法第97条第1項遺跡発見の通知の提出を受けた。遺跡の名称は、所在地周辺の通称地名「ヨシノヤ」から、「宇波ヨシノヤ中世墓（仮称）」とした。

平成24年12月18日午後、再び富山河川国道事務所の建設監督官と建設業者現場代理人の立ち会いのもと、氷見市教育委員会生涯学習・スポーツ課学芸員2名が2回目の現地踏査を実施した。踏査では、集石造構の近くで五輪塔地輪1点を採集したほか、重機用に設けられた作業道付近で青磁、須恵器の破片を2点ずつ表探した。また、集石造構の北西、丘陵斜面の上側において、ややまばらではあるが新たな集石造構の存在を確認した。

現地踏査で確認された遺構・遺物の分布状況から、集石造構2基を含むおおよそ20m四方の範囲を保護対象地と判断した。この保護対象地については、工事着手前に本発掘調査が必要であることを立ち会いに伝え、その範囲についての現状保存を依頼した。また同日、積み直されていた五輪塔をすべて回収し、採集遺物とともに氷見市中田の氷見市文化財センターへ搬入した。

平成25年1月7日には、富山河川国道事務所調査第二課の担当者と氷見市教育委員会生涯学習・スポーツ課の学芸員に、富山県教育委員会生涯学習・文化財室の担当者を加えた三者で、本発掘調査に関する協議を実施した。協議の結果、保護対象地については、平成24年度中に測量調査を実施した上で、平成25年4月以降本発掘調査を実施することになった。測量調査および本発掘調査の実施主体は

水見市教育委員会が担当し、調査費用は、事前調査は国庫補助事業、本発掘調査は国土交通省からの委託金で実施するものとした。また、集石遺構が複数確認されたことから、遺跡名を「宇波ヨシノヤ中世墓群」とあらため、埋蔵文化財包蔵地として追加の登録を行った。

(2) 平成24年度測量調査の概要（第6～8図）

平成25年度に計画された本発掘調査に先立ち、遺跡の範囲確認と現状把握を行うための測量調査を実施することになった。測量調査は、国庫補助事業として実施している埋蔵文化財発掘調査等事業の一環として、国庫の補助および県費の補助を受けて実施した。

測量調査は、保護対象地と判断した集石遺構2基を含む約400m²を対象とし、株式会社エイ・テックに委託して実施した。調査期間は、平成25年1月29日から同3月15日までである。

測量調査では、斜面の上段および下段に位置する集石遺構を対象として平面図を作成した。下段の集石遺構（第7図）は、180×130cmの長方形に10～30cm程度の川原石を集積したもので、斜面下の平坦地、標高25mに位置する。上段の集石遺構は、おおよそ480×320cmの範囲に3～20cm程度の礫が散布したものである（第8図）。平坦地から斜面への屈曲部から斜面側へ、標高29.3mから26.6mに礫の散布が確認され、礫中に古代須恵器1点が確認された。なお、上段と下段の集石遺構の間、斜面の直下には、重機用の作業道が設けられている。

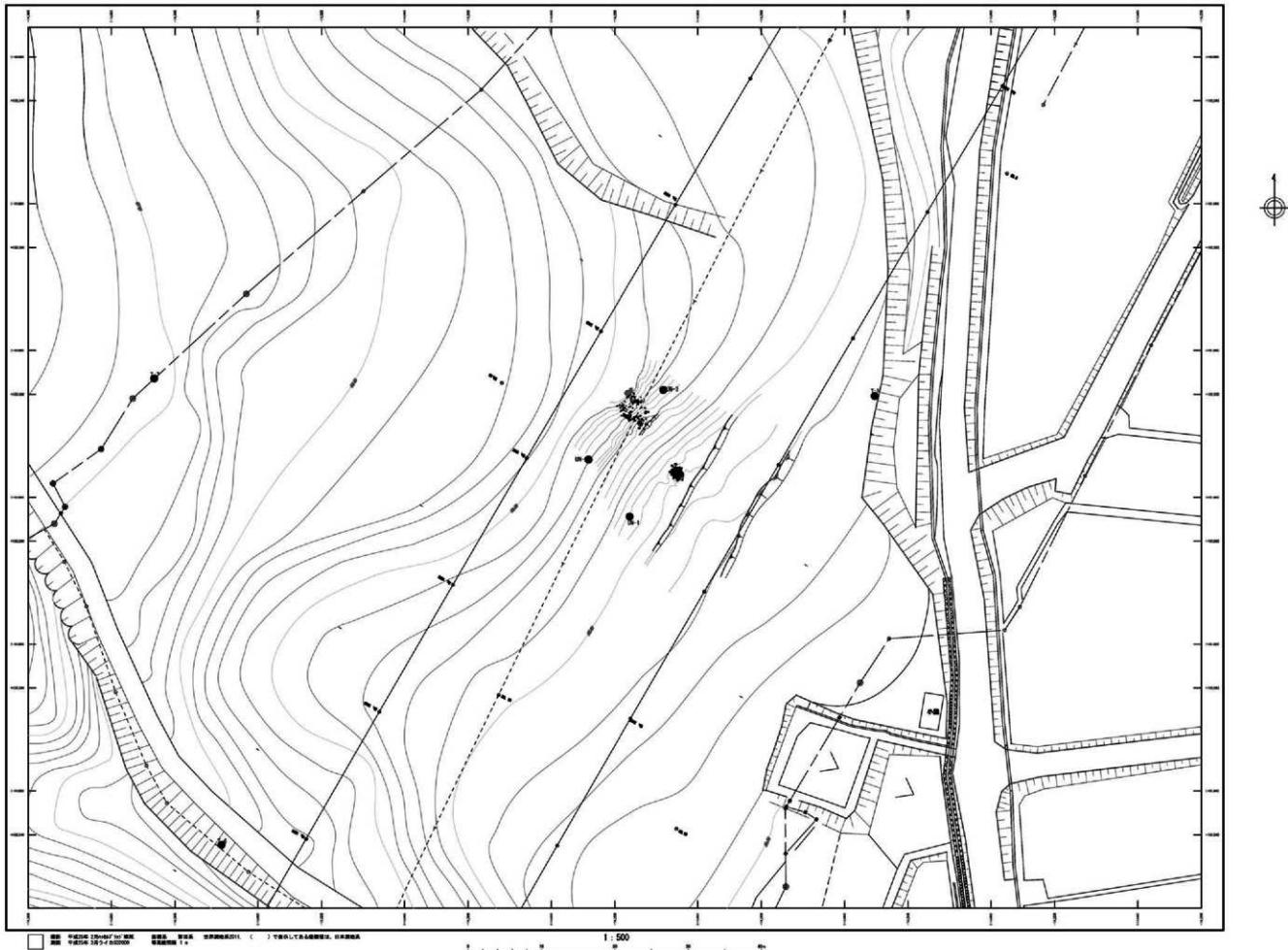
(3) 平成25年度本発掘調査の概要

平成25年3月5日付けで、国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所より発掘調査の依頼があった。それを受け、平成25年度当初の発掘調査実施を目標に本発掘調査の準備をすすめた。本発掘調査は、水見市教育委員会が主体となり、株式会社イビソクに業務委託して実施することになった。

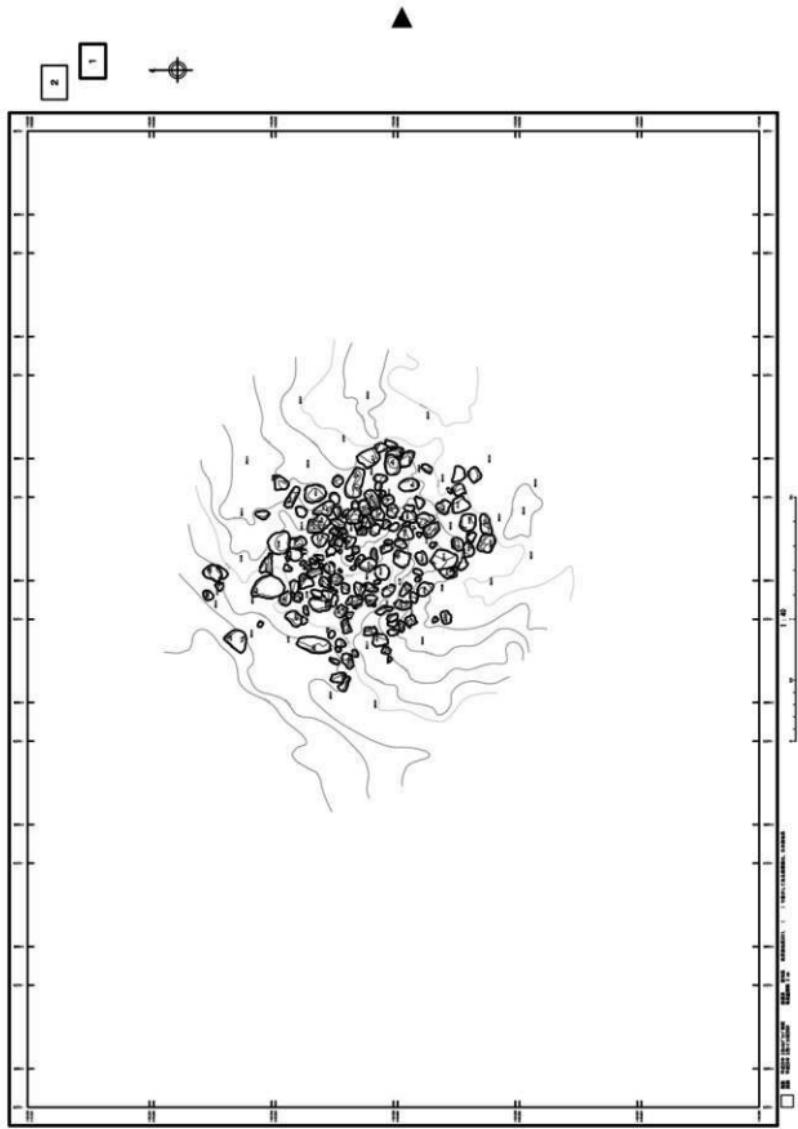
本発掘調査は、丘陵斜面の上段、下段に築かれた計2基の集石遺構、29m²を対象とした。現地調査の期間は、平成25年7月8日から8月29日までである。

調査では、丘陵斜面上段の集石遺構から多量の小円礫を被せた円形石組遺構3基が検出され、うち1基から焼骨が出土した。また、下段の集石遺構では、角礫に混じり数個体分の五輪塔部材が出土した。ただ、集石中には近現代遺物も混入しており、下段の集石遺構は、周辺に散布していた角礫や五輪塔を二次的に集積したものであることが確認された。

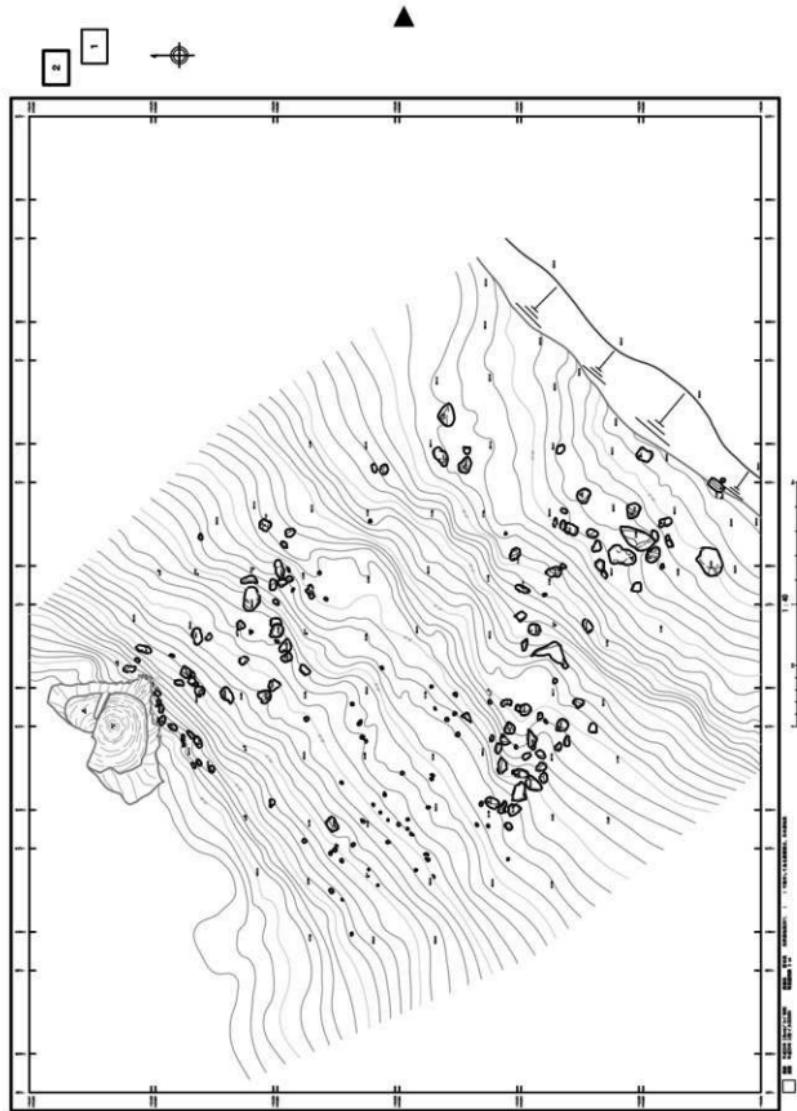
なお、宇波ヨシノヤ中世墓群の本発掘調査の詳細な成果については、本報告書に次いで刊行される『宇波ヨシノヤ中世墓群 能越自動車道七尾水見道路整備事業に伴う発掘調査報告』にて報告する予定である。



第6図 宇波ヨシノヤ中世墓群全体平面図 (S = 1/500)



第7図 宇波ヨシノヤ中世墓群集石遺構（下段）平面図 ($S = 1/40$)



第8図 宇波ヨシノヤ中世墓群集石遺構（上段）平面図 ($S = 1/40$)

引用・参考文献

- 大野 究 2003 『宇波地区の中世史』 『図説 水見の歴史・民俗』 郷土読本第15集 水見市教育委員会
加納史話編集委員会 1970 『加納史話』 加納振興会
- 兒島清文 1978 『第二部 郷土のあゆみ』『稲積教育百年 一教育と歴史—』 稲積教育百年史編さん委員会 稲
積小学校創校百周年記念事業協賛会
- 富山県神社庁 1983 『富山県神社誌』
- 水見市 1963 『水見市史』
- 水見市 1999 『水見市史』 9 資料編 7 自然環境
- 水見市 2000 『水見市史』 6 資料編 4 民俗、神社・寺院
- 水見市 2002 『水見市史』 7 資料編 5 考古
- 水見市 2006 『水見市史』 I 通史編 1 古代・中世・近世
- 水見市教育委員会 1984 『富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書』
- 水見市教育委員会 2000 『脇方谷内出中世墓』 水見市埋蔵文化財調査報告第31冊
- 水見市教育委員会 2004 『水見市埋蔵文化財分布調査報告（丘陵地区）IV』 水見市埋蔵文化財調査報告第40冊
- 水見市教育委員会 2008 『水見市遺跡地図[第三版]』 【改訂版】』 水見市埋蔵文化財調査報告第51冊
- 水見市教育委員会 2009 『稲積川口遺跡 一般県道鹿西水見線地方特定道路事業に伴う発掘調査報告』 水見市
埋蔵文化財調査報告第52冊
- 水見市教育委員会・富山大学考古学研究室 1995 『水見市埋蔵文化財分布調査報告II 1994年度』
- 水見市埋蔵文化財調査報告第17冊
- 水見市教育委員会・水見市立博物館 1983 『水見市遺跡地図 埋蔵文化財包蔵地所在地地図』 水見市文化財所
在地図 No.1
- 水見市立博物館 2010 『特別展 山城探訪 ～よみがえる中世～』
- 北陸中世考古学研究会 2006 『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』 第19回 北陸中世考古学研
究会 資料集



図版1 加納金宮遺跡周辺空中写真 (1947年米軍撮影) 国土地理院 白枠が遺跡の範囲



1. 調査区近景（南から）



2. 調査区近景（南西から）
右奥の社が金宮神社



3. 調査区近景（西から）
正面の社が金宮神社

図版 2 加納金宮遺跡試掘調査（1）



1. T1土層断面



2. T3土層断面



3. T4土層断面

図版3 加納金宮遺跡試掘調査（2）



1. T5土層断面



2. T6土層断面



3. T8土層断面

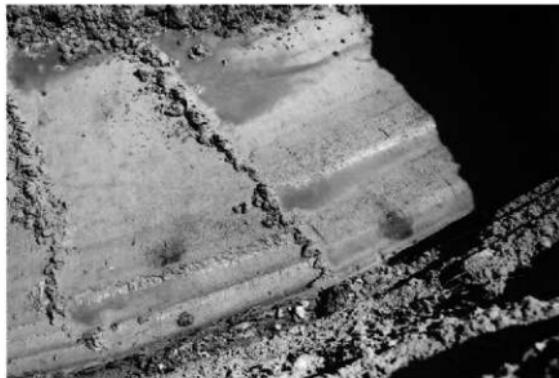
図版4 加納金宮遺跡試掘調査（3）



1. T11土層断面



2. T13土層断面



3. T13遺構検出状況

図版5 加納金宮遺跡試掘調査（4）



1. T15土層断面



2. T18土層断面



3. T21土層断面

図版 6 加納金宮遺跡試掘調査 (5)



1. T23土層断面



2. T24土層断面



3. T25土層断面

図版7 加納金宮遺跡試掘調査（6）



1. 作業風景（1）



2. 作業風景（2）

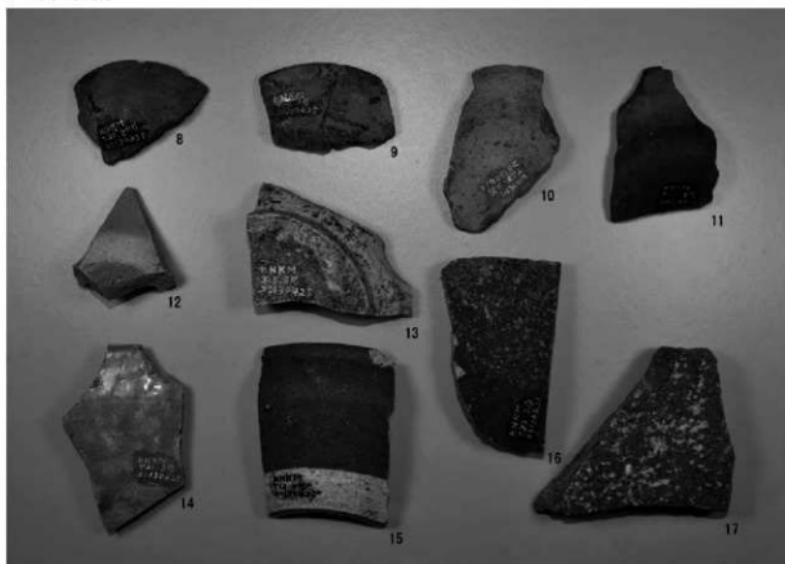


3. 作業風景（3）

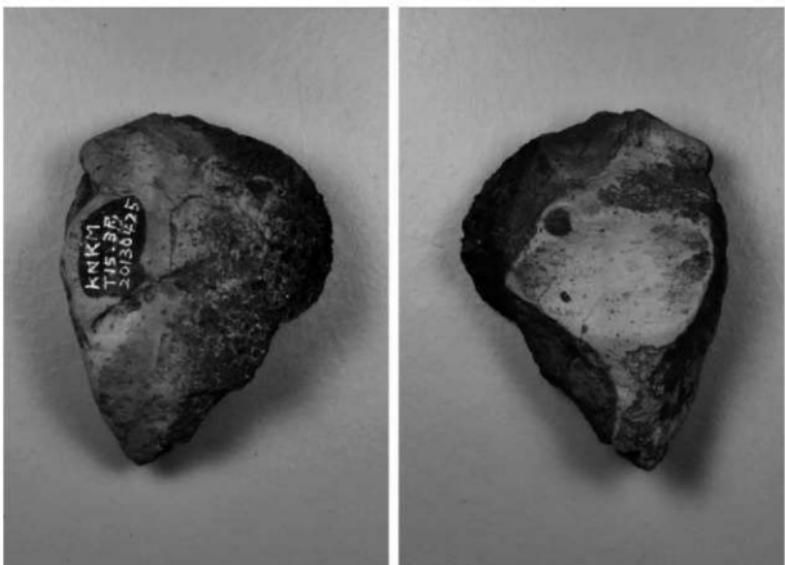
図版8 加納金宮遺跡試掘調査（7）



1. 中世珠洲焼



2. その他、土器陶磁器類
図版9 加納金宮遺跡遺物写真（1）

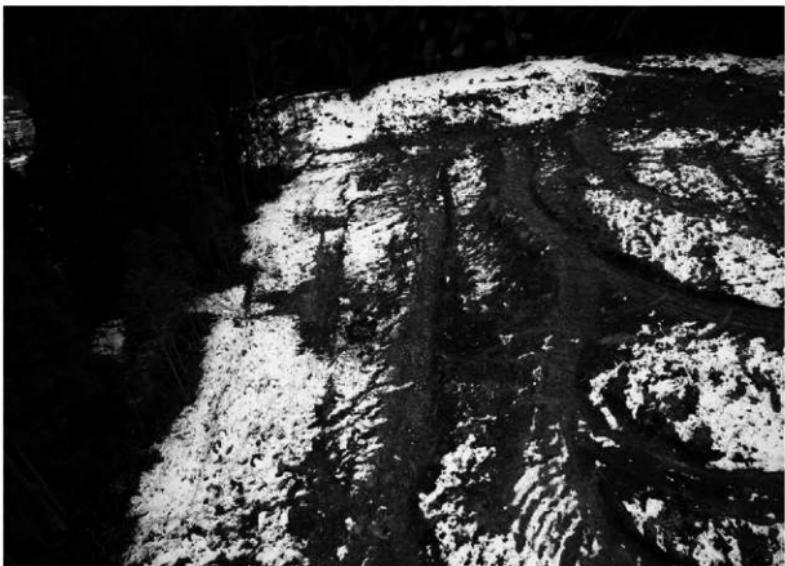


1. フイゴの羽口 (18)



2. 宇波ヨシノヤ中世墓群近景 (北東から)

図版10 加納金宮遺跡遺物写真 (2)・宇波ヨシノヤ中世墓群測量調査 (1)



1. 集石墓遠景（北東から）



2. 集石墓近景（南東から）
図版11 宇波ヨシノヤ中世墓群測量調査（2）



1. 下段の集石遺構



2. 上段の集石遺構



3. 五輪塔
工事関係者によって集積されたもの

図版12 宇波ヨシノヤ中世墓群現地踏査

報告書抄録

ふりがな 書名	ひみしないいせきはつくつちょうさがいほよん 氷見市内遺跡発掘調査概報 IV							
副書名	加納金宮遺跡 宇波ヨシノヤ中世墓群							
シリーズ名	氷見市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第63冊							
編著者名	廣瀬 直樹							
編集機関	氷見市教育委員会							
所在地	〒935-0016 富山県氷見市本町4番9号 TEL0706 (74) 8215							
発行年月日	2014年3月20日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° °'	東経 ° °'	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
かのうかなみや いせき 加納金宮遺跡	ひみ じきかまち 氷見市栄町	16205	109	36° 52' 10"	136° 58' 52"	20130424 ~ 20130426	312 m ²	試掘・確認調査
うなみ 宇波ヨシノヤ中世墓群	ひみ じきかまち 氷見市宇波	16205	398	36° 55' 20"	137° 00' 28"	—	—	測量調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
加納金宮遺跡	散布地	中世 近世	小穴	中世珠洲焼 中世土師器 フイゴの羽口	中世～近世の遺物のほか、 鉄滓やフイゴの羽口が出土した。			
宇波ヨシノヤ中世墓群	中世墓	中世	集石遺構	五輪塔				
要約	工場跡地の利活用に先立つ加納金宮遺跡の試掘調査では、工場敷地の整地土層・盛土層の直下の旧耕作土から、弥生土器、中世珠洲焼、中世土師器、青磁、白磁、瀬戸美濃、越中瀬戸、越前焼、フイゴの羽口、鉄滓等が出土した。遺構は樋架穴とみられる小穴を検出したのみで、工場跡地周辺は、かつての耕作によってある程度攪乱を受けているものと推測される。また、調査区南西側では、湿地帯の跡を検出した。以上の成果によって、本発掘調査は不要と判断した。能越自動車道の建設に先立つ測量作業中に不時発見された宇波ヨシノヤ中世墓群については、集石遺構2基を対象に、遺跡の範囲確認と現状把握を行うための測量調査を実施した。							

平成26年3月17日印刷

平成26年3月20日発行

氷見市埋蔵文化財調査報告第63冊

氷見市内遺跡発掘調査概報IV

加納金宮遺跡 宇波ヨシノヤ中世墓群

編集・発行 氷見市教育委員会

〒935-0016

富山県氷見市本町4番9号

TEL0706 (74) 8215

印 刷 有限会社 ひふみ印刷社